

会 議 錄

会議名	第8回辰野町立小・中学校あり方検討委員会
開催日時	令和7年7月25日（金曜日） 午後6時30分～午後8時15分
場所	辰野町民会館 大会議室
出席者	出席者 委員17名中12名、教育委員5名、事務局5名
会議次第	<ul style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 教育長あいさつ 3. 委嘱書交付 4. 委員長挨拶 5. 協議事項 6. その他 7. 閉会
会議結果	<p>5. 協議</p> <p>(1)「辰野町の新たな学校を、小中9年間を見通した学びの場として考えていく」ことを全体で確認した。</p> <p>(2)「集約した学校で子どもと地域とのかかわりをどのようにしたらよいか」全体討議を行った。</p> <p>6. その他 特になし。</p>
発言者	発言の内容
教育長	<p>2. 教育長あいさつ 皆さんこんにちは 7月も残り1週間となりました。7月は6月の半ば頃から毎日の猛暑ということで、この7月、35度を超えた日は辰野町で3日ほどあって、とんでもない7月でございました。暑い暑いと言っているうちに7月も終わろうとしているわけですけど、まだ7月、この後の8月はどうなるのか。今年の猛暑はどうなのかちょっと心配になってまいります。 そのような中、金曜日ということで1週間の疲れも溜まっているところお集まりいただきまして大変ありがとうございます。</p> <p>今日は第8回目の委員会ということになります。今回委員がまた2人ほど交代しておりますけれど、また新たな委員をお迎えして、この委員会を開催できること、ありがとうございました。</p> <p>前回第7回の委員会では集約された学校ではどんな学びが大切なのか、また必要なのか。そしてまた、子どもたちが年々多様化していく、これに対応した学校のあり方はどうなのか、集約された学校と地域との関わりはどうなのかという視点で、グループ討論をしていただきました。</p> <p>それを受け、今日は第8回目ということになります。地域における子どもの育ちや学び、そしてまた地域と学校との関わり、これについて協議いただきます。先ほど話が</p>

	<p>ありましたように今日5名ほど欠席をされておりますので、いつもの小グループの討議ではなくて全体会という形をとらさせていただきました。</p> <p>第1回目の検討委員会のときにもお話をさせていただきましたけれど、子どもの数が急激に減少していく。それに合わせてただ単に学校を集約してこの委員会が終わるという、そういう検討委員会ではなくて、集約した後の学校でどういう学びが大切なのか、そこまで協議をしていただきたいというお話をさせていただきました。まさにこここの部分、地域と学校との関わり、地域における子どもたちとの関わり、こら辺をどうするかがの辰野町の学校の、あるいは辰野町の地域の大事な部分になってまいりますので、この部分について今日は実際に現状はどうなのかという部分のお考えも把握しながら、確認しなしながら、さらにそれが一歩進んで集約されたときに、どういう形ができるのか、どういう方法が考えられるのか、そんな協議になっていけばというふうに思っております。</p> <p>いずれにしましても社会も大きく変わってまいります。それに価値観も変化していく中で、子どもの数だけは本当に残念だけど急激に減少していく。そんな中にあっても子どもたちにとって明るい学びができる、そんな学校をそんな学びを提供できるような場所として期待しておりますので、本日もまたよろしくお願ひしたいと思います。</p>
委 員 長	<p>4. 委員長挨拶</p> <p>こんばんは。今、教育長さんの方から、暑い暑いという挨拶があったわけです。本当にいつ梅雨が明けたかわからないくらい暑い日が続いております。昨日も今日も本当に暑かったわけですが、田んぼの稻はグーンと伸びてですね、今のところ水もいっぱいあるようで、熱中症や夏バテを知らないような感じで非常に元気に大きくなっているなというのは見るたびに感じるところであります。</p> <p>連日の猛暑の中、委員の皆さん体調を崩さず元気でおいでで、忙しい時間帯にご出席いただきまして誠にありがとうございます。</p> <p>今年度になって先ほどのように4月に7名の方、それから本日2名の方ということでお合わせて9名の方ですが、全体の委員17名ですので、半分以上の方が代わられたっていうそんな状況もあります。大変だと思いますけれども、それぞれの資料の引き継ぎ等をしっかりと行っていただいて、今後の委員会の話し合いあるいは活動に加わっていただければと思います。</p> <p>それで、今私達が何をやっているかという、委員会として何をやっているのか一番もとになるのが、設置要項です。すぐ出ますでしょうか。何回か出されておりますので、第1回目でなくともどこかの資料にあるかと思うんですが、辰野町立小・中学校あり方検討委員会設置要項ということで、第1条から第8条まであるわけなんですが、当然、今日これからやる内容についてもその中の一つということになります。昨年からやっている私達もやはりここに戻りながらやっていく必要もありますし、まだ不十分なところについては、ここに返りながら話の方に加えていただければと思います。</p> <p>少子化が急激に進む中で、子どもの学びの環境のいろんな維持、あるいはまたよりよい学校環境を保障していくためにですね、教育長さんや事務局の表現を借りると、少子化の進展に対応した新たな学校として、明日への希望が持てる、期待を持って新たな学</p>

	<p>びのできる新しい学校、あるいは、明日に繋がる新しい希望の持てる学校。子どもたちにとって、そして町民にとっても夢や希望の持てる学校、その学校を目指して今まで話し合ってきて、今日これから事務局の方からも報告ありますけれども、現行の3小学校を何らかの形で集約、あるいは再編成をしていく。そしてその後小中9年間を見通した小中一貫教育の学びの場に繋げていくと。そのためにはどうしたらいいかっていう、それについて様々に話し合いが進nできているんじゃないかなと思います。しかしですね、今までを振り返ってみると、今までの話し合いの経過から、少子化の進展に対応した新しい学校、あるいは辰野町の新たな学校とはどのような学校なのか、検討委員会として、形になって自分の頭の中に浮かんでこないっていうのが正直なところあります。細かい内容等については教育委員会の仕事になるんでしょうけれども、このあり方委員会の中で、とりあえず大きな方向を出すっていう面では、実際にそれぞれの方が今の学校、そしてこれから集約あるいは再編成されている学校を思い浮かべながら、いろんなものを考えていくことをしていかないと、これからのいろいろな学校の姿が見えてこない、そんなことを思います。</p> <p>前回も挨拶の中で触れたわけなんですけれども、新たな学校をイメージしたときに、学校を集約して再編成するっていうことは、いわゆる今の学校が全て閉校するってことですよね。そして、新しい学校ができる。まずこれが、私の頭の中に浮かんできた一つの姿であります。変わることのない良さは受け継ぎながらも、私達が意識の変革といいますか、新たな学校について考えていくことがたくさんあるのではないかなと思います。また保護者の皆さん、地域の皆さん、町民の皆さん、ときには子どもたちも含めて、集約していくまた再編成していくことの意味と大切さについて、やはり丁寧に説明をして理解していただくような努力が今後は特に必要になってくるんじゃないかなと思います。それが少子化の進展に対応した新たな学校として、明日への希望が持てる、期待を持てる新たな学びの学校、そういうところに繋がっていくのかなとそんなことを思います。</p> <p>集約あるいは再編成されるっていう学校は、通学区域も当然広がり、全校児童数、あるいは児童生徒数が増え、学校環境も大きく変わり、また子どもたちの学習環境ももちろん</p> <p>変わっていくことだと思います。今日これから話題になる地域との関わり方もきっと大きく変わってくると思います。本日この後全体で協議を予定している子どもたちの地域での学びや学校と地域との連携などについても同じだと思います。現状でぜひ残したいこと、変わらざるを得ないこと、再編成による良さ、考えられる不安や心配、いろんな面から皆さんの意見を出し合いながら、子どもたちのためによりよい学校のあり方を考えていきたいと思います。</p> <p>本日もよろしくお願ひいたします。</p>
委 員 長	<p>5. 協議</p> <p>それでは全体討議の1のところの、小中9年間を見通した学びの場としてというところで説明をお願いします。</p>
	本日の資料の1ページに、前回第7回の委員会のまとめ、そしてそれが本日第8回に

事務局

繋がっていくという形で出させていただいております。この資料につきましては、開催通知と一緒にお送りしておりますので、お読みいただいているかと思います。

全体討議の最初に、集約した学校で小中9年間を見通した学びの場として考えていく、このところを改めて確認していただきたいわけですけども、第2回の委員会から小中をまとめるとか、小中一貫とか、こういったことが出てまいりました。それで、それを前提にというような形でもってここまで来たわけですけれども、ここで改めて確認したいということと、もう一つ委員の皆さん方が半分以上変わられたということで、以前小中一貫教育制度についてはお話してありますけれども、また改めてここでもう一度確認したいという意味で、今回取り上げさせていただきました。

それでは資料No.2、2ページからになります。これは第5回の検討委員会で説明させていただいた資料になります。それをもとに印刷いたしましたので、大変見にくくて本当に申し訳ありませんが、また前回の資料等を見返していただければと思います。

小中一貫教育制度に基づいた学校として、義務教育学校と小中一貫型小学校中学校、この二つがございます。義務教育学校と、それからいわゆる小中一貫校の一番の違いは、義務教育学校は一つの学校である、小中一貫校は小学校中学校の基本的な枠組みは残っていて、その上で一貫した教育を行うということでございます。2ページの下に、小中一貫校と義務教育学校の違いを表にしてございますけれども、小中一貫校の修業年限は小学校6年中学校3年というようにわかっております。それに対して義務教育学校は一つの学校ですので、修業年限は9年となります。その場合、前期6年後期3年ということが標準かと思いますけれども、例えば5年と4年それから前期中期後期というような形で、4年3年2年ということに柔軟に変えることも可能になっております。それから職員の組織ですけれども、小中一貫校はそれぞれに校長先生がいて、それぞれに職員組織がある。義務教育学校は、これは一つの学校になりますので、校長先生は1人、職員組織も一つということになります。教育課程については大きな変わりはありませんけれども、どちらかと言えば、義務教育学校の方が柔軟な教育課程の編成ができるかなということです。それから教員ですけれども、小中一貫校はそれぞれ小学校中学校に教員が所属するわけですので、小学校なら小学校、中学校なら中学校の教員免許状があればいいということになります。義務教育学校は小中両方の教員免許証を持っているということが原則となります。ただ柔軟に対応できるようです。施設に関しましては、これはもう両方とも同じで、1年生からいわゆる9年生までが一緒の校舎という場合もありますし、それぞれの小学校中学校が隣り合わせになっている、あるいは離れている。ということで、一体型、隣接型、分離型のような形になっております。設置の手続きにつきましては、小中一貫校は市町村教育委員会の規則、義務教育学校は市町村の条例、これが必要になってまいります。以上のこととは3ページにまとめてあります。

具体例として全て長野県内にある学校ですが、小中一貫校としては佐久穂町の佐久穂小中学校、義務教育学校として、信濃町の信濃小中学校、大町市の美麻小中学校の資料を付けてありますので、大変見にくくて申し訳ございませんが、またご覧いただきたいと思います。

	<p>今日これから関わる中で、こんな学校になるんじゃないかっていう一つのイメージを膨らましていく、その一つのもとになっているかと思いますので、こういう制度のもとに集約あるいは再編成という形で進んできている、またそういう考え方のもとにこれからも進んでいくというように考えてもらえばと思います。</p> <p>それでは辰野町の新たな学校ということを冒頭に申し上げたわけですが、小学校あるいは小・中学校が集約、再編成されて小中9年間通した学びの場になっていくという。そういう中で、本日の資料の1ページになりますが、第8回委員会のところを見ていたい、子どもたちと地域との関わりをどのようにしたらいいかっていうことを考えていきたいと思います。</p> <p>そこで大きな二つの討議の柱が示されています。1ページの後半の方ですが、子どもたちが地域を学ぶ、それから学校と地域の連携、この二つがあります。最初の柱のところに書いてありますように、地域の特色を生かした教育とか、あるいは地域を支える教育、あるいは地域で子どもを育てるといったような面から、地域のどのようなことを学ぶのか、また何を学ぶのか、どのように学ぶのかっていうようなことも含めてご意見をお出しいただければと思います。現在のそれぞれの学校での様子、集約、再編成をした後子どもたちが地域を学ぶというところに話し合いを進めていきたいと思います。</p> <p>二つ目の学校と地域の連携というのは、そこにもありますように、学校ボランティアのこと、あるいは地域住民とのふれあいとか公民館と地域住民が集まる機能、そんなところが一つの着眼点かと思いますが、やはり今も関わってる委員の皆さんもおいでかと思いますので、それぞれのご意見等をいただければと思います。もちろん二つのこの柱については切り離せないものも当然ありますので、ご意見によっては両方に関わって進めさせていただくかもしれません。</p> <p>そこでちょっと私反省をしたのですが、前回、集約した学校でどのような学びを保障するかって言われたときに、なかなかイメージが出てこないってことがありました、今回は現状をいろいろお話を聞いて、そこから集約、再編成した後のところを、いろいろ考えながら話を進めていこうということで、今日、南小の校長先生、委員としておいでになります。それから、他の学校につきましては事務局の方で現状、子どもたちが地域を学ぶというと、どんなことを学んだり、またどんなふうに特徴を生かした教育していくかっていう、そのところを若干ここで扱っていただいた後に、柱について話を進めていきたいと思います。資料を作っていただいてありますので、南小学校校長先生、お願ひいたします。</p>
宮原委員	<p>配させていただいた資料ですけれども、学校と地域のどんな組織を作っていただきて、どんなふうに繋がってるのかというようなことを、現在の様子をお伝えしようと思って、組織図、学校支援ボランティア、どんな活動をしているのか、ということがまとめられているものがありましたので、資料にさせていただきました。</p> <p>まず本校に限らず、小学校ですけれども、学区はある程度狭い範囲内に当然あります。ですので、小学校3年生のところで地域探検というようなことで、歩いて地域をめぐりながらそれぞれ地域にはどんな施設があるのかということを学んだりしております。その中で本校では、コミュニティスクール運営委員会ですか、学校支援ボランティアの</p>

皆さんとか、あと学校評議員の皆さんとかでいろんな形で支えていただきながらご支援いただきながら、学校運営をしているわけです。ここで一つ南小学校としてありがたいのは、ご存知の通り南小学校は羽北地区にある学校ということで、羽北地区の皆様の思いを、とても感じながら4月から過ごしておりますが、それを取りまとめていただくコミュニケーションスクールのコーディネーターの中心になっていただく方の方がとても大きく、そこに組織図があるんですけれども、コミュニケーションスクールをまとめていたいでいる方を中心に学校支援ボランティアも動く、いろんな活動に対してその方を通して活動を支援していただいているという形かなと思っています。その方が声をかけると、地域の方たちが動く。ちょっとPTA会長に声をかけるとPTAの皆様にご協力をいただく。そういうような形でキーパーソンのような、集約をしていただいている方がいるということが地域との繋がりではとても大きいなと思います。その方を通して、顔の見える関係、職員ともそうですが、子どもたちもその方を通して地域の方の思いを知るというような場面がたくさんありました。中を見ていたければと思うんですが、学校支援ボランティアの活動内容をチェックさせていただいておりますが、これは過去に行われてきた学校支援ボランティアの活動も含まれていますし、今年度既に行っているものもありますし、これから行おうとしているものも含まれています。この4月から行われた内容では、学習支援や読み聞かせ、そして、クラブ活動のご支援をいただく。花壇作りでは、花を植えて育てていただいていることがあります。PTA作業の中で庭木の剪定を行ったり、知らない間に草刈りをしていただいているたり、

あと4月から1年生を中心に、登下校の見守りをしていただいている。どこの学区、どこの学校も同様だと思います。学校の方で畑がありますので、そこにいもを育てて秋には地域の方をお呼びしながら学校支援ボランティアの皆様をお呼びして、焼き芋会を盛大に行うというようなことが計画されています。

子どもたちにとってはそんな活動を通しながら、地域の皆様と顔の見える繋がりなり、地域の方から声をかけていただいて地域の方の思いを知る、そんなことが日々の活動の中で積み重ねてこられているかなと思います。また、南小の特徴として、育ちの森といって、

もうずいぶん歴史があるそうなんですが、植樹をしたり、森を育てたり、自分たちが植えた木がどういうふうに育っていくかということを見守っていたり、あと、巣箱を作ったり、そんなことをさせていただいております。この春の森の活動では、どうしてこの活動を始めたのかということの経緯も6年生とそのコーディネーターの中心になっていただく方が話し合うという、そんな場面を作っていただいて、思いを語っていただいた、そんなこともありました。

本当に地域の皆様の思いのおかげで、学校活動、教育活動が進められているなということを感じております。

委員長	子どもたちにその地域の何を一番学んで欲しいっていうふうに考えていますか。
宮原校長	校長としては、子どもたちがやはり1人で生きてるんではなくて、地域の方、いろんな人に支えてもらいながら生きているんだ。そして、それぞれがそれぞれの思いを持ちながらそれぞれの夢を実現しながら生きている人たちがいるんだってことを知るって

	ことも一つかなと思ってます。
委員長	<p>ありがとうございました。</p> <p>それではその他の学校について事務局の方でお願いします。</p>
事務局	<p>特に学校ごとということではなくて、辰野町の小中学校でどのようなことを学んでいるのかっていうことをお話させていただきます。</p> <p>地域を学ぶということに関しては、1年生が生活科の学習で校外へ出て学習するわけですけれども、例えば荒神山ですとか地域にある公園、神社、公共施設等へ出かけて、いろんなことを学んでおります。それから、幼稚園、保育園の皆さんとの交流は盛んに行われておりますし、社会科の学習、あるいは総合的な学習の時間として、町内のお店ですとか、工場、農園、それから歴史的な建造物、商店街のようなものを学んでおります。学校によりましては、地域の美化活動を行ったり、町の未来について考える、このような学習も行っております。</p> <p>それから学校ボランティアさんとの関係、地域の人と学ぶということですけれども、今、南小の発表にも出てまいりましたように、野菜作りとですとか、米づくり、花づくり、それから餅つき、氷もちづくり等をご指導いただきながら学んでおります。それからクラブ活動のご指導、あるいは行事で遠足とか登山のお手伝いもしていただいておりますし、中学校の写生会のご指導もやっていただいております。登下校の見守りとか、読み聞かせ等も行われております。それから、中学校では、お仕事チャレンジですとか、住みよいまち作り、中学生議会というような形で、町そのものを学習の題材として学んでおりますし、部活動の指導に関わりましても地域の方にご指導いただいていることもあります。</p> <p>それから地域の行事、イベントへの参画ってことも大きな点であるかと思いますけれども、ほたる祭りには金管バンドですとか太鼓ですとか、いろんな形で子どもたちが活躍しておりますし、地域の神社で発表する、あるいは地域の文化祭に作品を出品する、このような関わりも見られております。</p> <p>それから地域行事への参画、ここのところがこれから繋がっていくところではないかと思いますけれども、育成会等で各地区ごとに行事等を行っておりますが、そこへ子どもたちが参加しているっていうことで、例えば平出の育成会では、地域の子どもたち、他の学校へ通っていても、地域の子どもたちみんながその行事に参加している。そのような例もありますので、こここのところが今後の参考になっていくんじゃないかなと。つまり学校を支えると同時に、地域の子どもたちを支える。仮に地域から学校がなくなってしまったとしても、その地域の皆様が地域に住んでいる子どもたちを支える、そういうようなこともこれから大事になってくるのかなと、そんなことを思っております。</p> <p>雑駁ですけれども、今の状況等をお話させていただきました。</p>
委員長	<p>二つの柱について現状の報告といいますか、今こんなことをということをそれぞれ話していただきました。</p> <p>実際にはいろんな課題もたくさん抱えている各地域、また学校だと思うんですけども、とりあえず先ほどの二つの柱で最初のところ、子どもたちが地域を学ぶというが、地域の何を学んで欲しいかっていうところ、あるいは地域を学ぶ良さとか、どんなふう</p>

	<p>に学ぶかとか、地域の方との関わり方とか、具体的に課題は何なのかと。この辺も集約、再編成した学校を念頭に置きながら意見を出していただけると、話が進んでいくかなと思います。こんなふうにしていったらいいじゃないかとか、あるいはこういう課題が残っているとか、そんなことも含めてぜひご意見をお聞かせいただきたいと思います。</p> <p>メンバーの中に学校の評議員の方もおいでになりますし、PTAの方もおいでになります。直接関わってる方も多いかと思いますので、ぜひご意見を聞かせいただきたいと思います。とりあえず最初の、子どもたちが地域を学ぶ、どんなことを学んで欲しいのかっていうところを中心に進めていきたいと思います。</p>
A 委員	<p>今事務局の方から説明していただいたんですけど、南小学校の場合にはこういう資料があって、今どういうふうに地域と連携してるかっていうのはよくわかる内容になります。ただ、今現在の辰野町他の小学校中学校について言われたんですけど、なかなか全部覚えきれなくて、もしそういった資料があったらいただきたいです。現在どんなふうに地域と関わっていて今後もそれが必要なのかどうなのかっていうことも踏まえて、これからどうしていったらいいのかっていうのを検討した方がいいのかなと思いまして。全部理解できていないので、そういう資料がもしあつたらいただきたいなと思います。今後必要かどうか、何が必要かっていうことを検討する上で、現在どうしてかっていうのを今説明がありましたが、私は理解できていないので、そういう資料がもしあればいただいた上で具体的な内容を検討できるんじゃないかなと思いますのでよろしくお願ひします。</p>
委員長	<p>ちょっと前後するんですが事務局どうですかね。</p> <p>話し合いはこれから進めさせてもらいますが、できるだけ資料的なものも用意できるところをしていただきたいと要望しておきます。</p> <p>ご意見の方いかがでしょうか。</p>
B 委員	<p>小学校ということで今考えているんですけど、小学校の低学年っていうのは、未分化な時代なんですね。ですので、さっき宮原校長先生おっしゃったように、生活科の勉強とかで外に出るときには、歩いて行けるところで学んでいる。それが現実だと思います。</p> <p>3年生くらいまではそういう学習が行われているんじゃないかなと。4年生とか5年生とか大きくなってくると、自分の身近なところから視野が広がって、町とか県とかっていうようなところに広がっていく。そのところが一つに集約するっていうことについては、大きな課題になるんじゃないかなって私は思っています。この間辰野西小学校の子どもたちが川島の事を勉強したいって言って、川島の方に5年生がバスできました。いろんなところを回ってきたんですけども、要するに遠足みたいな形にしないと学びにならないか。そこは大きな課題かなと私は思います。小学校の子どもたちの数が減って、大きな問題になってきますが、小学校というよりむしろ中学校の方が2クラスになってしまったら非常に大変だと思います。先生確保できないですね。一番大きな問題は、そこなんじゃないかなって私は思います。やっぱり低学年は本当に身近な生活もできるところで学べるっていうのが本当は一番いいんじゃないかな、そんなことを思います。</p>

委員長	地域の何を学んで欲しいですか。その辺までもう一歩踏み込んで、地域の何を学んで欲しいかっていうのをちょっと今方向づけします。
B 委員	例えば、地域でもって外に出て、川に行ったなら、身近なすぐそばの川でいろいろなものが採れます。見つけられます。虫を見つけることもできます。それから、地域で働いてるおじさんおばさんがいたとすると、そういう皆さんに関わって、作業してるおじさんと関わることができます。それは、小さい子どもたちにとっては大きな学びじゃないかなと。さっき宮原先生、人との関わりっていうようなことも言ったんですけど、人との関わりとか、あるいは自然や社会、本当に身近なものを感じているってことが学びの中で大事なことなんじゃないかなって私は思います。ちっちゃい子どもたちは自分のすぐそばのところとか学校のすぐそばのところとか、自分の生活してるところの中でいろいろなことを学んでいくと自分たちのものになるんだけれど、例えば今の川島の子どもたちは、辰野西小学校に通ってきて勉強してるわけですけれど、川島での具体的なものっていうのはあんまり勉強できないですね。辰野西小学校の学校のそばになんかいろいろあってそこで学んだとしても、具体的に川島で学ぶってことは、やっぱり少なくなってきたらやってるんじゃないかなっていうふうに思いますので。そんなところを思うわけです。
委員長	<p>ありがとうございました。</p> <p>集約の仕方についてはまだいろいろ詰めるところいっぱいあるかと思います。</p> <p>地域の何を学んで欲しいかっていうその辺のところで、もう少しどうでしょうか。学校の評議員の方とか、実際に学校にいろんな形で関わってる方なんかいかがでしょうね。</p> <p>(事務局資料配布)</p> <p>先ほど事務局から発表していただいた部分の骨子というか大まかなところを、今配られたものをまた参考にしていただければと思います</p> <p>いかがでしょうかね。地域で子どもたちが何を学んでるかわからないって言われてしまふと話が進まないわけなんですけれども、今の子どもたちを見ている保護者の皆さん、また学校の運営に関わっている評議員の皆さん、またいろいろな立場で関わっておられる皆さん、何を地域で学んで欲しいかっていうところをはっきりしていくかないと、これから再編成、集約していくても、そこでどういうふうに今までのような地域との関わりをっていくかというところがなかなか見えてきませんので、今もし課題があるとしたら課題を、また今のようにいいところとして続けていってほしいとなればまた新しい学校でいろいろなことを実現できればしたい、そういうことになってきますのでどうでしょうか。</p>
C 委員	子どもと地域との関わりを考えるにあたって、まず子どもたちが大人になったときに、その地域に残ってほしいという視点は私は大事だと思うんです。大人になってその地域に住み続ける、あるいは外に一旦出て、何かを学んで、また帰ってきて、地域でもう一度そのことを生かしてもらう、そうしないとますます地域は衰退していっちゃう。今、なんで1年間に70名とかの出生数になってしまったか、そのところをやっぱり大事に扱っていかないといけない。一番大事に扱っていくところはそこだと思うんです

	けどね。いかにその地域に若者が残るか、その視点で、まずいろんなことを組み立てていく必要があると思うんです。
委員長	地域の方として保護者として学校では何を学んで欲しいのかっていうのは、いかがですかね。Cさんの場合、前回のときもやっぱり若者や子どもがいなければ問題にならないとおっしゃっていましたので。
C委員	学校でその地域を学ぶっていうときにですね、先ほど宮原校長先生には夢を語ってもらっているいろいろあると思うんですけど、子どもの立場に立ったときに、自分の家族が地域や学校とどういうふうに関わってるかっていうことがまず一番子どもにとって関心事になることだと思うんですね。だから、親が学校に何らかの形で関わっている、PTAで関わったり、あるいは祖父母が学校ボランティアで関わっている、そういう環境が子どもにとって、私のお父さんお母さんが学校でこんなことしてくれて、あるいは、じいちゃんばあちゃんが学校でこんなことをしてくれる。それが大きな励み、将来の励みになってくる。それが育っていくもとになっているということだと思いますよね。大人になって外へ出て、故郷を思う気持ちが育まれてくる、そういう環境で育まれていくっていうことだと思いますけどね。
D委員	私は元々塩尻で育っておりまして、結婚して子どもを産んで、辰野町に親戚がいた関係で土地を売ってもらって移住みたいな形です。子どもたちは生まれも育ちも辰野町です。高校生と中学生と小学生といいるんですけども、私はこの町の生まれじゃないのですが、ここに暮らしてここの地域が良くないとかそういうことは一切なくて、子どもたちも辰野町が大好きです。では自分が生まれ育った塩尻がどうなのか、行けば懐かしいですし、何となく故郷って感じはあるんですが、私は女だからっていうこともあって嫁いだというか。夫も東京で、どちらもこの地域で生まれ育ってはいないんですが、暮らす場で温かく迎えていただいて安全に子どもたちが育っている状況に非常に満足しています。生まれ育っている自分の家のそばに学校があるっていうことは、非常に嬉しい。近いと楽なんですがいいかなと思うんですけども、それ以上に子どもが少ないことによるデメリット、先生の数が少ないと、子どもの数が少なくて学びが小さくなっちゃうとかっていうことの方が地域の繋がりとか地域での学びっていうことを大切に考えること以上にデメリットが大きいので、集約しなきゃいけないのかなっていうふうに思っております。地域の学びが例え少なくなったとしても1ヶ所に集約することの方が子どもたちの学びにとってメリットがあるんであれば、多少削られても仕方がないのかなっていうのが私の意見です。学校の周辺で、田んぼ作りですとか、散策とかっていうことは、そこで学べる範囲でいいのかなっていうふうに思います。もう少し自分が年を重ねたら、ふるさとっていうものが大事だっていうのはもっとわかってくるのかもしれないんですけども、今子育て真最中で、今日の子どもも、明日の予定だけで頭がいっぱいなもんですから、その先のこと、子どもたちが成人して仕事について、また戻ってきて欲しいとかってところまで想像ができるないせいかも知れないんですけども、一つに集約された学校の周辺はそこも辰野町なので、それでもいいのかなっていうのが正直な私の感想です。
E委員	今日の議題が、集約した学校での地域との繋がりをどうしたらいいか、どうするのが

	<p>いいかっていうような、ざっくりそういうようなことだと思うんですけれども、これ今でも同じことなんで、集約した学校だから地域とどうだとかっていう言葉の前に現在もあるわけですね。小学校、中学校と地域の繋がりっていうのは今でもあって、南小はこんな立派な図面付きのものまで出してくるようなすごい繋がりがあるわけなんで、次の新しい学校でどういうふうにっていうことは、今はどうなんだっていうことがあるんですけど、これ、南小の書いてあるこれは全て学校側から見てるんですよね。学校側から見ている、下に学校支援から行事支援まで四つの項目があるんですけども、これは全て学校が提案をした行事なり依頼に対して、地域が応えている状態だと思うんですよ。これは集約した学校の中でも可能だと思うんですよね。組織さえ作れば、可能だと思います。一番の問題は行事支援の中の一番下の小さい字の部分、これは地域が学校というよりも、地域が地域の子どもたちに対してアプローチをかけてる内容なんですね。先ほどの説明にもありましたけれども、平出の子育て支援協議会は平出区に住んでいる児童生徒という考え方でやっていますので、才教学園に行ってお子さんもいますけどもこれも平出の子だという考え方で、地域の行事を行っております。東小学校につきましても、各地区の温度差というか、活動の差がもうバラバラで、四つある区の中で平出区は六つの町内に分かれていますけど、その六つの町内の温度差も相当なものがあります。前から私言ってますけども、教育委員会側の方で子育て支援協議会なり、公民館の分館に働きかけて、もう少し町全体をアベレージにしていかないと、あまりにも格差があるんだろうなっていうふうに今私は感じています。地域との繋がりをどのように作っていくかっていうことは、もう少し地元のそういったところから子どもたちに何を教えていくかっていうところを強めていかないと、おそらくうまくいかない。学校側からのアプローチっていうのは可能だというふうに私は思ってますので、組織さえ作れば支援は可能だと思ってますので、これから新しく再編された学校、集約された学校の中でどういうふうに考えていくかっていうことはここで論議することじゃないと思いますので、そういった方向で2面あるっていうことを理解した方がいいんじゃないかなと思っております。</p>
F 委 員	<p>今、Eさんの方からお話がありましたけど、私は今村の小さい地区で小学生が四、五人しかいない小さなところですけども、いろんな行事を今までやってきました。でもコロナがあって、そのあたりからもう行事をやらなくなっちゃったんですね。残念でした。でも、去年はみんなやれやれって言って夏祭りとか天神様とか正月飾りを作ったりとかそういうことでやってるんですけども、やっぱり大人がやらないといけない。学校からこういうことをやってくださいって、あんまりしてないと思うんですよ、地域には。ですから地域の中で今言われたように、分館の役員が手を抜けば1回もやらんですむ。楽なことなんですけども、こういうものをやっていかないとだんだん廃れていくちゃう。私、ふれあい事業の責任者をやったときは七夕まつりをやって、短冊をお年寄りと子どもで一緒に書いて飾って、竹を持ち寄って、お年寄りと一緒にご飯を食べた、こういうことやったんですけども、いやもう私がおりてからもう1回もやらなくなっちゃったし、地域の役員の方が手を抜いていくと、子どもの行事って何もなくなっちゃう。学校との繋がりもなくなってくるような気がする。やっぱり分館の行事をもっと盛んにやっても</p>

	らった方がいいと思います。
委員長	今、地域の捉え方っていうようなものが大きな話題となっていると思います。集約あるいは再編成後の学校と地域の連携の話も出てますので、そちらの方も合わせてご意見を聞きたいと思ってるんですが、結局私達の捉える今の地域と再編成、集約された後では当然地域という考え方が変わってくるわけです。だからその辺のところもどう連携していくか、何ができるのか。先ほど言いましたように、具体的にいいものをどう残していくのかとか、いやこれはどうしても駄目だからやめざるを得ないかなとか、いろんな見方があるかと思うんですけどね。学校と地域との連携ということ、また地域の捉えも考えながら様々なご意見をありがとうございました。
教育長	地域と学校、地域と子ども、この関係で先ほどからどんなことを学ばせるのかとかいろいろ議論があったんですけど、簡単に言えば、小学生の低学年も高学年も関係なく中学生も関係ないんだけれど、人と人との関わりを学んでいくということだと思うんです。そしてもう一つ大事なのは、学校ではできない五感の体験をするということ、五感で感じることだと思うんですね。そうする中で地域の人たちから支えられている、守られている、愛されている、こういうところを子どもたちが感得していく、頭で教えられるんじやなくてちゃんと感得していく、こういうことじゃないかな。だからこれは小学生中学生関係ないんだろうと思うんです。ここに尽きるんじゃないかなと思うんですね。そうするとこれは、南小で発表していただいたように、地域が様々なことで学校を支えていく、これが一つありますし、もう一つは平出の話が出ました。今村の小澤さんの方からも話が出ましたけれども、学校とは関係なく地域が地域の子どもたちを活動に巻き込んでいく、この二つがあるんだと思うんですね。でも、目的は先ほど言ったように人と人のふれあい、それから五感で感じる体験をする、つまり学校では体験できないことを地域が担っている。ここの部分ではないのかな、そんなふうに思います。以上の様に、二つの側面でこれを考えていかないといけないのかなというふうに思っています。
G委員	私は自分も東小学校出身で、辰野ずっと育ってるんですが、私達のころは中学校40人の9クラスあった時代でした。なので二、三軒隣が同級生っていうような感じの地区なんすけれど、先ほど南小の地域との関わりを見させていただいて、私が小学校の頃も南小は子どもの数が少ない分、団結力がすごいあって、地域との関わりも多分そうだと思いますし、子ども同士の団結力もすごくて、中学に上がってからも、南小の子どもたちの仲の良さっていうのは、ちょっと特別なものがあったなと思うんですね。昔と今が違いすぎるところがたくさんありすぎて、私は東小で南小に比べたらすごく生徒数も多かったんですけど、それでもやっぱり地域との関わりがすごく多くて、普通に大人の方といつでも喋れる環境っていうんですかね、そういう環境にあったんですね。 私、赤羽なんですが、赤羽区で地域の方々にお手伝いしていただいて、サツマイモの苗植えとか、サツマイモ掘りとか、そういった行事があつたりするんですが、やはり今は習い事が多くて、ほとんどの子が習い事をやってるので、せっかく地域の方が畑を貸してくれたりお手伝いしてくれたりしても、子供が集まらない。そういうのがすごく切

	<p>ないというか、習い事等があるから仕方ないっていうのもあるんですけど、子どもが集まるために何とかならないかなっていうのをいつも思っていて、自分の子どもも野球をやってるんですが、地区の行事があるときは、野球が練習の場合は、私は絶対野球を休ませて地区の行事に行かせるんですが、同じ地区で野球をやっている子が何人かいいるんですが、その子たちは全員野球に行くっていう状態なんですね。なので、そうなると、実は野球がやる気ないのかなっていうふうに思われる。その地域の行事が大事にされてないっていうのが現状かなと思いますし、昔と違って、そういうのを楽しみにしてない子どもが多いっていうのも問題かなと思います。あと、そういうことに参加しないことによって、やっぱり大人と喋る機会がない。近所のおじさんとかおばさんとかにも気軽に声をかけたり挨拶したりできる子が少ないですね。そうするとやっぱり大人の方からも声をかける機会が減っていって、繋がりが少なくなっているのかなって思います。大人と喋らないので、今の子どもでコミュニケーション能力がある子が少ないので、そういうのが原因かなと思います。</p> <p>先ほどの将来ここに戻ってきてほしいっていうのも、自分も東京に1回出たんですけど、戻ってきましたし、東京に出た方がいっぱいいるんですけどほとんどの方が戻ってくるなって改めて思いました。これから子どもが少なくなっているのかなって思っています。大人と喋らないので、今の子どもでコミュニケーション能力がある子が少ないので、そういうのが原因かなと思います。</p>
委員長	<p>実際に各地域での様子っていうのは、自分のお子さんを通して、今いろいろな課題があったわけなんですが、いかがでしょう。地域と学校の関係、自分の住んでる地域を含めてできれば学校と関わらせながらと思うんですが、いかがでしょうかね。</p>
H委員	<p>地域とか学校っていうことを考えたときに、子どもたちのためにっていう視点はもちろんものすごく大事なことなんですが、その地域にとって小学校なりがどういう存在なのかって考えたときに、やはり非常に大きな比重を占めることだと思ってます。</p> <p>南小の場合は我々の時代は羽北分校で4年までいわゆる分教場。5、6年が辰野西小学校ですから、辰野西小学校の分校としてあって、それが南小に昇格したみたいな格好なんですけれども、これでまた南小がなくなるということは、地域との関わりにおいて非常に大きな問題であるっていうふうに考えてます。要するにその地域の大きな資源の一つというような考え方もあると思う。羽北地区を考えたときに、一つは中央道の伊北インター。それから鉄道の駅が羽場駅がある。それから南小という学校がある。そして、地域にまだまだ居住地を増やせる可能性のあるエリアがあるっていう四つの大きな資源があって、地域を今後支えてくんだろうっていうふうに考えています。それを考えたときに、私は南小は非常に大事な存在だなっていうふうに考えています。</p>
委員長	<p>いろいろな地域、各学校、あるいは学校と地域の関係の中で、今方向はどうしても地域の捉えというところへ行ってしまうんですけども、実際にこれからたどつていくだろう道っていうのは、何らかの形で地域、いわゆる通学範囲が広がって、そして地域のとらえが変わらざるを得ないと。そうすると、今皆さんのおっしゃっているその良さが、実際にこれから再編されて、集約されたときに、それができなくなるっていうような形で今皆さんお話をしているんでしょうか。それとも、その新しい環境の中で、またそ</p>

	<p>いうものを作り上げてくるということについて皆さんのお考えみたいのをお聞きしたいんですけどね。ただ南小みたいな形も同じ形では当然これはもういられないことははつきりしてると思います。また、集約をして一つの学校になんでも、必ずしも子どもが増えるとは限りません。</p> <p>そういう状況を考えたときに、いろんな形があるでしょうけど、一つに集約されたりあるいは再編成されたときの地域と学校を今みたいな視点で見ていくときにですね、少し先を見たりとか、今まで残してきたものとか、その辺のところも触れながら、もう一度意見いただければと思うんです。</p> <p>私、もう少し課題みたいなものがたくさん出ると思っていたんですね。というのは各学校では今地域との関わりの中あるいは連携の中で、課題もたくさんあるかと思います。</p> <p>先ほどの南小の発表とか事務局からの報告を見ていると、環境のところもあったり、また地域の中で子どもが育っていくっていう、そういう良さを皆さん出していただいたわけなんですけれども、実際にこれからまた違った環境の中で、その地域の捉えが変わったりしていく中で、そういうものをどんなふうにどうしていったらいいかとか、あるいはもう少し形の違ったものがあるんじゃないかとか、それについてはいろんなことを皆さんお持ちかなというふうに思っております。</p>
I 委 員	<p>令和の日本型教育ってこれ中教審の答申ですよね。その中で、個に応じた指導と協働的な学びというのが柱になってますね。それからいくつかあるけど教師の人材の問題があるけど、一番まず原点に帰って、個に応じた指導から協働的な学びへ。要するに、個に応じた最適な学びが孤立した学びにならないように、協働的な学びの充実を図ると。だから地域に対しても結びつけていくと。それと同時に両立に向けて、ICT ですよね。ICT って話が出てないんだけど、これがなければ今後生きてけないもんで。要するに学校でこれをやっていかなきゃ大変なことだと思うので、このことについて教育長がどういう認識を持たれてるか伺いたい。ICT はこれもう、もう中教審でも大きな柱ですからね。要するに、バラ色に書いてあるんですよ。個に応じた指導と協働の学び、その両立に向けて ICT を積極的に活用するって書いてあるんですよね。文科省の指導ではね。それをどういうふうに理解されてるか伺いたいのと、それからそもそも今子どもが少なくなっていますよね。その中で例えばですね、びっくりしたんですけども、箕輪でいくと 800 人から 900 人、辰野は 400 人ぐらいですけど外国人の方がおりますよね。そのお子さんたちのように、日本語を母語としない子どもが増加してますよね。そしてもう一つ貧困という問題もあるわけですね。その二つの点で教育長の考え方を聞かせてもらいたいんですけど。ICT は協働的な学びの中で、地域と関係なく並立していくのかどうかということですね。</p>
教 育 長	<p>ICT、タブレットに代表されるような。これは気を付けなければ行けないのは、先ほど私が大事にされなければいけないっていう五感を使った体験っていうのができないということなんですね。タブレットの中ではバーチャルの世界での学びになってしましますので、これで学んだつもりになってるととんでもないことになってしまいます。五感で体験するってのは、匂いもあったり、それから感触もあったりする。これを地域でや</p>

	<p>ってくっていうのは、地域と関わるのはタブレットでは駄目です。ただ自分が五感で体験したものをタブレットに入れ込んでまとめていくとかそういった時には使っていけるので、ですから気をつけないとタブレット、ICT が万能だっていうふうに理解をされる方、誤解される方は結構いるんだけど、そういうのはないということで、あくまでこのタブレット、ICT 機器についてはこれはツールなのだということなんですね。使うことを目的にしようとするとえらいことになってしまいます。</p> <p>今子どもたちが様々な個性特性を持って生きている中で、今までの昭和の時代のような一斉の授業、学びっていうのはもう限界にきている。1人1人の学び、例えば個性に応じた学びをしていくために、今言われた令和の日本型等では個別最適なってこと、一人ひとりの学びに沿った教材なり、学び方を用意してやっていくことにおいては、当然一人ひとりがその ICT を使いながら五感をフルに使って学んでいかなければいけない。そしてそれを集約をしたり友達との情報交換をしたりするため、ときにはこの ICT を使っていくと、そういうことになってくるんだろうなと思うんですね。ですからその部分をうまく使い分けをしていかないと、使うことが目的化してしまうと、全く意味をなさない。あとやっぱりその五感というのは、特に小学生中学生は五感をフルに使っていかなきやいけない。私は理科の教師です。理科がまさにこの五感を使って体験をしないと感動が生まれない。感動がなかったら深い学びができる。高校生あるいは大学生だったら、もう基礎が十分に身についておりますので、このバーチャルの世界でも学びも十分です。でも、小学生中学生においては、まず五感だと思います。ICT は五感、それを補完するもの、より効果的に学ぶために使っていくんだというふうに私は理解します。</p>
I 委 員	ICT を別途に扱ってくれるということですね。今後。ICT、要するに ICT 教育についても今後取り上げていただけるということですね。
教 育 長	あえて取り上げるとか ICT はもう使わなければ、これからの中学校教育も成り立たない。だけどこれが主になっちゃうと駄目だという、小中学校においては。
I 委 員	結局中教審では子どもたちが多様化しているということの中で、今言ったように外国の言葉のこともあるし、地域との関わりもしなきやいけないけれども、その中でもう一つの柱として ICT というのはやっていかなきやいけないっていうことを言ってますですね。一番大きな柱として。だから、これから小中一貫校になるのか義務教育学校になるのか、その中で広域の問題とかキャバの問題の中で、やはりそういうことは大きなベースじゃないですかね。
J 委 員	中学校においては今ここに載っていること、さらには、それ以外にも様々なところで小学校で書いていただいていることに関わっても、例えば読み聞かせのことがありましたり写生会の指導をしていただいたりとか、地域の方に学校においてて様々なお話を来ていただいたり、様々な形で地域との学びそれから地域に支えていただいている学びがございます。中学校としては、今お話を出しているように学校が集約されていくことになっても、今中学校がお世話になってるまたは地域と繋がりを持っている学びっていうのはずっと続していくんだろうなと思っておりますし、続いていかなければいけないなって思っております。

	<p>両小野中学校もございますけれども、辰野中学校はこの辰野の地域に一つの中学校っていうことで、たくさんお世話になっていて、その形は続いていると思いますので、そこに小学校が仮に集約されてきたとすれば、その小学校で行われていることや、小学校での学びの部分が乗り入れてくる、その部分が強くなっている、中学校にとっては身近なところで小学生が生活をしている、そこに、小中学校の生活も一緒になっていく。だから小と中の繋がり、小学生と中学生の繋がりっていうことがとても出てきて、その部分にその地域との繋がりっていうものも入ってくるんだろうなと、そういうふうに聞かせていただいております。繰り返しになりますが、集約されたとしても、中学校が地域にお世話になったり、地域と繋がりのある学びはずっと続いている、それは、人数が仮に少なくなっているって規模的なものが多少小さくなっていくことはどうしてもあるかもしれないんですけど、中身として続していくってことは継続していくんじゃないかなと考えております。</p>
委員長	<p>大きく見れば小学校の集約された形が中学かなと思います。形の上ではね。中学のカリキュラムの方で、具体的にその地域の良さとか、あるいは学んで欲しいようなことがわかるよう組み込まれているのがもしあれば紹介していただければと思います。</p>
J委員	<p>先ほど配られた紙のところにございますように、いわゆるお仕事チャレンジ、住み続けたいまちづくり、中学生議会と総合的な学習の時間という枠の中で学んでいることはもちろんありますので、そういったことは比較的わかりやすく見えるというように思います。もちろんそれ以外にも、例えば年に4回ですかね、地域の方に来ていただいて、朝の読み聞かせ。例えばあの大きい中学3年生が読み聞かせの方のお話に10分から15分間じっと耳を傾けている。そのことが国語とかそういうことの学びに繋がっていく部分もあると思うんですけど、やはりあの小さい子が読み聞かせを聞くように、中学校2年生3年生になっても絵本を持ってきていただくこともあるんですけど、そういう読み聞かせをしっかり聞く、そういう時間を取れるということ。それからついこの間も1年生が行わせていただきましたけれども、写生会のところに美術協会の方が来ていただいて、実際に美術の授業として組み込んでいただいていること。それから、戦争体験を聞くということで地域の方においでいただいて中学3年生が平和教育等の一環でお話を聞きするっていうようなことを行なっています。部活動等においても、両面があると思います。地域に助けていただいている、指導していただいている部分もあれば、部活としてはとてもありがたいんですけど、地域の方から、こういった活動と一緒に取り組んでもらえないか、こういうことを一緒にやってもらえないかというお話をいただけるので、美術部であるとか、そういった部活動が地域と活動をタイアップしながら行っていくっていうような、そういうこともあります。先輩の姿を見てそれを後輩が学んでいくってこともありますので、こういうことが地域との繋がりであるんだっていうことは、中学生の生活の中にかなり組み込まれていて、それがもちろん学校の教育課程の中にも組み込まれているっていうことが辰野中学校はたくさんあるというふうに認識しています。</p>
委員長	<p>いずれ小学校3校が集約の方向で出ているんですが、今の中学校がその一つの形で、通学範囲が当然広がって、その中でまた中学校的な地域が関わると思うんですが、そ</p>

	<p>いう一つのイメージ的なものとか、活動の内容についてはまた今後参考になっていると思います。特に、今の、地域からの要望があるというところなんかもですね、先ほどから何人かのお話もありましたけれども、参考になるところかなと思います。</p> <p>保育園の場合はいかがですかね。</p>
K 委員	<p>保育園の方は本当に地域の方とかかわりがあつたり小学校の子が保育園の方に出向いてくれたり、学校の方に行かせていただいたりしています。</p> <p>コロナ禍を経験した子どもたちが今ちょうど年長さんになってるんですけど、コロナ禍で保育園も休んで誰とも会わないっていう環境を経験した子たちが、今コミュニケーション能力がないなっていうのをすごく感じていて、そこがすごい大事なことなんだなっていうことをすごくお話を聞きしながら思いました。地域の方とのふれあいとかいろんな人との触れ合ひっていうのがすごく大事なんだなっていうことを感じました。本当に核家族が増えてきて兄弟姉妹もすごく少なくなっている中なので、そういう経験が学校に行ったらできたらいいのかなっていうことはすごく感じています。地域の方たちはきっと大変だなっていうように思いますが、昔を経験していない若い世代の人たちの意見というのもまた聞かせてもらつたらいいかなっていうことも感じました。</p>
L 委員	<p>いろいろお話を聞かせてもらって、どうしようかと思ってることってたくさんあるんですけれども、僕は子どもの学びとかいろんなものを考えたときに、やっぱり自分に当てはめてみたり自分の子どもがどうだったかなということを常に考えながら話をしたり考えたりするようにしてるんですけども、僕の子どもは伊那市に住んでいる関係で全員が伊那小でした。やっぱり伊那小で育った子どもたちは、賛否両論あると思うんですけども、地域との関わりは非常に大きかったです。子ども3人いるんですけども、やっぱり地域での活動っていうのを先生が非常に上手に主導して持つていて地域と協力しながら、僕も家の中で聞いてると子どもたちが、どこどこの家には何々さんっていう人がいてこんなことを教えてくれたっていうのを非常によく教えてくれたっていうこと也有って、そういう中での地域の育ちっていうのはやっぱり小学校の周りで協力してくれる人がその先生たちと協働しながらやるっていうことは可能だというふうに思っています。それはやっぱり先ほど関さんがおっしゃったように、学校から地域に働きかけてやるっていうことで地域のことを考えていくのは僕は可能だと思ってるんですね。そんな中で子どもたちを育していくことっていうのはあるんですけども、やっぱりそれは小学校がある場所にあつたら、低学年だったら行動範囲が限られてくるし、高学年になればある程度広くなってくるしっていうふうに必ずなってくるのは僕は仕方がないと思っています。</p> <p>それともう一つあったように、各地域、伊那小もかなり広いです。かなり広いエリアで動いているので、各地域での、例えば育成会だったりだと、地域のお祭りだったりっていうことは必ず動いているんですけども、先ほどあったように、それは学校とは別の時間で動いているので、土曜日だったり日曜日だったり祝日になると、うちの子どもたちはみんなサッカーに行っていました。それは、子どもたちが僕は選ぶべきだと思っているんです。何でかっていうと、子どもたちは、幼稚園の先生たちもみんな言ってるんですけど、面白いと思った瞬間にしか学びを発動しないと僕は思っているの</p>

で、今の話の中で、大人の硬い考え方でいく中で、子どもたちが果たして今日の地域の行事を面白いと思ってついてきますかっていうことを我々は自問自答しないといけないと思っています。だから、今までずっと引き継がれてきたことをそのままやるっていうことも大事かもしれないんですけども、それを今の子どもたちが面白いと思ってついてきてくれるよう僕らはどういうふうにするかっていうのを地域で考えなきゃいけないっていうことが一つと、関さんがおっしゃっていたのは確かにその通り、地域ごとの温度差っていうのはかなりある。それは何かっていうと、年寄りは、僕ももう年寄りに足を突っ込んでますけれども、年寄りばかり増えてきたところでは、そういう役割をする人がいないということです。だから仮にですけど、地域でそういった役員、役割を請け負う人がだんだん減っているということは、それを地域に丸投げすることは僕は非常に乱暴だと思っているので、仮にですけれども地域で公民館の役をやってくれって言ったら、仕事忙しいんで無理ですって僕だったら言うっていうこともあるので、果たして皆さんできますかっていうことと、それと、今そういったことをやる保護者、大人がどれだけ増えてるかと、そういうことだと思います。

それと大きくなったら地域に帰ってきてほしいっていうのは皆さんの中にあると思うんですけども、矛盾することが僕の中ではたくさんあって、地域のことをいろいろ子どもたちに伝えていって、大きくなったらこの地域に帰ってきてほしいという思いが一つと、その反面、グローバルな立場で、そういう思いで働いていってほしいって思っているので、外に出たら外の方が面白いし、こっちに帰ってきたら仕事がないから帰ってこれないっていうのも現状だということで、いろんなことをどんなどうしたらいいんだろうと僕はさっきから思いながら考えていました。

M 委 員 科

私、長野県の人間じゃなくてわからないんですけど、南小、西小、東小、地域って狭いんですか。例えば南小だと西小とか東小に通っている子たちは、かなり狭い地域の子たちなんですか。例えば南小、西小、東小、ある程度広い、いろんな区が何個か集まつところですよね。一つの区にあるわけではないですね。たくさんの区から来るわけですね。地域地域っていうんですけど、果たして例えば西小の生徒たちが、全ての地区の行事に参加してるのっていうところは不思議に思いました。それがまず一点目ですね。それと地域の広さっていうところがちょっと私は疑問があつたんですね。2点目なんですけど、学校教育の目的ってのは3個あって、確かな学力を身につける、豊かな人間性を養う、、あとは生きる力を身につける、この三つが学校教育の三本柱って言われてるんですね。今文科省の方で言ってるのが、主体的な行動、主体的な学びっていうこと。これも新聞にもよく出ているので、皆さんご存知だと思います。先ほど宮沢教育長の方から出たんですけど、主体的な学び、主体的な行動を身につけさせるためには、やはり五感で勉強するってことがものすごい大事なんですね。先ほどからL委員言つてましたけど、地域に戻りたい教育って確かに大事なんです。でも果たして地域に残ることがその子の幸せなのかってことも考えなきゃいけない。学校って、地域って何が一番大事なんだ。子どもが一番大事なんですよ。地域より何より、子どもが一番大事です。その子にとって何が一番幸せなのかなっていうことを考えた上で、その上で地域が協力していくっていう体制、僕はそれが、本来の姿じゃないかなと思うんですよね。だから、

	聞いてて、ちょっと疑問に感じたことはありました。ただ、学校と地域との関係性ってのは非常に大事だってそれは僕も考えていますので地域との関係を否定するわけではありません。ただ地域と産官学じゃないんですけど、産官学にプラス地域を加えた形で、郷土愛プロジェクトなんていうのがこの上伊那にはありますけど、それに合わせて地域もその中に加わって、子どもの育成を考えしていく方がいいんではないかと思います。
N 委 員	さつきJ委員おっしゃったみたいに、小学校が集約して中学になるっていうのがなるほどなどと、そうだよなと思いました。なので、その大きさっていうのはあまり関係なくて、関わり方はそんなに変わらないんじゃないかなと思って、なので、集約しても、町全体で子どもたちを見るっていうスタンスを取っていくっていうのは、やっぱりあるのかなとお聞きしてました。
副委員長	感想なんんですけど、私自身は南小出身で辰中を卒業して今に至るんですけど、地元に支えられて生きてきたんだなっていうのをすごく思いました。今ボランティアってすごく言ってて、ボランティアって何って思ったときに、令和5年度私は上伊那PTA連合会の副会長をやっていて、その関係でPTAの全国大会に行ったときに、ボランティアとは未来への投資っていうことを教えていただいたんです。なんかその通りだなって思って、私も地元の辰野町に育てられて、今辰野町に住んでいて、今度は私が未来への投資、今の子どもたちにボランティアっていう形で何か返していきたいなって思うんですが、ボランティアとか、やっぱり心にゆとりがないとできないので、そんな心のゆとりのある人間にまずなりたいなって思いました。
委員長	予想した通りあっち行ったりこっち行ったりでした。私もこの会を始めるのは非常に心配だったんですね。自分で先が見えなかつたもんですから、どういう話になるかと思ったらやっぱり思い通りですいません。私の司会がまずくて、十分皆さんのご意見が出せなかつた部分もあるかと思いますが、また次回、もうちょっと話しやすい方向で、また話し合いの方法を自分で持ちながらやりたいと思います。
教育長	これをね、整理すれば、できると思います。
委員長	今後の方向、本当にその先を見据えた皆さんのご意見がありました。若い方から、また私よりも先輩方もおいでになるわけですが、いろんな方のいろんなご意見やお考えもわかり、それぞれが大事なところがありました。改善していかなければいけないところなんかも明記しておりますので、ぜひまたまとめたものを基にして、何らかの機会にきちんと位置づけていければと、そんなことを思います。 協議の方はこれで終わりということにさせていただいて事務局の方でよろしいですか。
O 委 員	この会は10年先の子どもっていうのを見ているわけですよね。子どもの大体の数っていうのは出てるんですか。
委員長	人数ですか。
O 委 員	人数です。
委員長	また資料を作つてお渡します。
教育長	8月1日に町から出される「広報たつの」に令和11年までの子どもの数を載せてあ

	ります。あり方検討委員会の情報を町民に伝えるということで、第1回目を8月号に載せますので。1ページの4分の3のスペースに載せます。
学校支援課 長	ご協議ありがとうございました。 今最後に出ましたけれども、「広報たつの」8月号から連載形式でこのあり方検討会の内容を踏まえて掲載しておりますので、また皆さんご覧いただければと思います。 それでは後のその他になりますが、事務局はいいですか。
事務局	6. その他 特になし。
学校支援課 長	7. 閉会 それでは以上をもちまして第8回の辰野町立小・中学校有難検討委員会を終わりとさせていただきます。 大変ありがとうございました。気をつけてお帰りください。